

## 論文の内容の要旨

論文題目 北米建築論壇におけるジョン・ラスキン受容に関する研究

氏名 江本 弘

本論文は、19世紀中葉から20世紀中葉までの書籍・雑誌史料の網羅的調査をもとに、イギリスの批評家ジョン・ラスキン〔1819-1900〕の北米建築界における受容様態を明らかにするものである。

ニューヨーク、ボストン、シカゴを中心としたアメリカの建築論壇では、ラスキンの建築論に対する解釈は国家的・地域的時代背景を反映して経時的に大きな変容を蒙る。ラスキンははじめ、国内で既に萌芽していた機能主義的建築理論と同一の理念の唱道者と理解され人気を博したが、建国百年博覧会後は装飾的建築観の象徴とされ、現代建築思想の仮想敵と見做されるようになる。この動向のなか、アメリカの建築論壇はラスキンに対する参照を途切らすことなく、機械美学、歴史様式からの脱却、装飾の否定といった論題を他国に遥かに先駆け明示し、議論を発展させていた。これまで建築思想史研究上十分な踏査が及んでいなかったギルデッド・エイジの建築論壇の展開は、ラスキンを肯定的に援用し工業美論を発達させたエンジニアの動向とも並行し、20世紀の近代建築思想と実践の基礎を形づくった。

19世紀中葉のアメリカにおいて、“建築”とは特別に建造物のことを意味していたのではなく、神の似姿としての人間が創造する、人間の智が込められたすべての被造物と同義だった。その半神が創造の手段とするのは応用科学としての工業であり、工業的成果は当時、市井においても明確に宗教的な含みをもって賛美された。ボストン、ニューヨークのハイブラウな画家、建築家、評論家らによって構成された美術界はひとつの閉じた人的ネットワークを作りあげ、この建築観を表現するために『建築の七燈』（1849）を筆頭とするラスキンの建築論を受容し援用した。

“ラスキンが芸術における善であり真であるものすべての唱道者”であった1850年代末までは、ラスキンは特にゴシック建築の擁護者として理解されていたわけではなく、このような前提のもとに、広く“建築の大原理”の唱道者としてアメリカの建築論壇に唯一の位置を保っていた。L・アイドリッツ、R・スタージス、H・ヴァン・ブランドといった建築家はこの時代を経験した主要な論客であり、彼らが表白した建築観は、南北戦争以降の

“ゴールデン・リープ”期にあっても超越論的感性とエンジニア的感性を基礎としたものだった。

当時の建築領域、エンジニアリング領域の建築観には類似性があったが、後者の領域で60年代後半に発揚した美術論壇のなかでも、ラスキンの建築論は合理的な無装飾建築、すなわち“エンジニアリング・アーキテクチャー”概念の援用元とされた。他方、同様の建築観はスタージスが1871年に発表した「現代建築」においてラスキンからの誤った引用を通じてさらに明言され、国内のエンジニアや、さらにはイギリスの建築論壇も注目するところとなった。工業・土木生産物の合理的美を語るためにラスキンの理論が肯定的に援用される場合は国内の工業発展の状況に呼応し、初期は造船分野、60年代末ごろには橋梁設計分野、そして80年代からは鉄道分野へと移りかわっていく。

こうしたアメリカ独自のラスキン受容のなか、1850年ごろにはラスキンの建築論に託して鋳鉄、ガラスなどの新素材を用いた工業建築の展望を語ることも可能だった。しかしこのときにも、建築における鋳鉄利用を忌避したラスキンに対する懐疑論はすでに現れはじめていた。アメリカ建築家協会設立後初の建築論争である鋳鉄建築論争(1858-59)は、ラスキンの建築論が有した絶対的な権威に対する疑念が顕在化する契機だった。その後60年代をかけ、アメリカの建築論壇ではラスキンの建築論の権威は失墜し続ける。アメリカにおいて、“ラスキンの建築論”とはその受容の初期より矛盾した表象を抱えていた。

アメリカの建築界は1850年代半ば以降フランスのエコール・デ・ボザール卒業生を輩出するようになり、第一号卒業生のR・M・ハントを中心に“フランス派”を形成するようになる。それは折しもラスキンの絶対的権威に疑念が兆しはじめた頃でもある。この事情を反映して、60年代以降のアメリカの建築論壇は、それまでラスキンに託して語った建築の合理性の問題を、新たにフランスの建築家・建築理論家であるE・E・ヴィオレール＝デュクを通じて語るようになる。そのため60年代以降のヴィオレール＝デュク言及記事はそのほとんどがラスキンとの比較言及であり、この展開のなかで、はじめ“建築の大原理”の唱道者として言及されたヴィオレール＝デュクは、1875年の英語版『建築講話』の出版までに、ボザールのクラシシズムおよび、古典主義建築の合理性の唱道者と見做されるようになっていく。対してラスキンには不合理なゴシシストとしての理解が根づいていく。

ラスキンとヴィオレール＝デュクの表象をめぐるこの展開は一面において、アメリカの建築家たちのイギリス派ゴシシストとフランス派クラシシストの対立の構図を表していた。ただし、このような見かけ上の対立の裏には、自国の建築的伝統の創出を目した両陣営の融和の道が模索されていた。この目途が明言された初期論考はアイドリッツの「様式論」

(1858)である。このときその止揚は“ラスキンの建築理念”として、古代ギリシャ時代と中世の中間に発揚した、ロマネスク建築の設計原理に求められた。以後、この融和は60年代末以降の論壇において、異なる論客により繰り返し言及されることとなる。そして188年、この理念はM・スカイラーによって“ゴシックの誠実”と“クラシックの洗練”の融合であることが明言された。そのかんにはトリニティ教会のコンペティション(ボストン、

1872) が位置づくが、H・H・リチャードソンが設計し竣工させた勝利案はこのゴシックとクラシックの止揚に意識的なものだった。

1876年にフィラデルフィアで開催された建国百年博覧会は、アメリカのエンジニアリングの水準を他国に知らしめる機会でもあり、美術分野ではイギリスの絵画、建築に関する実物教育の機会でもあった。建築論壇においては、後者が契機となりゴシック・リバイバルの動向が新たに盛隆を迎える。ただし、イギリスの文物流入に促されたこのゴシック・リバイバルには、ラスキンを主要な典拠としたそれまでの国内動向との差異化が目論まれていた。そのため、そこで新たに“ゴシックの原理”を語るためには、フランスのヴィオレ＝ル＝デュクの理論が援用されることとなった。ヴィオレ＝ル＝デュクに対するクラシシストとしての理解はこの動向の中で衰微し、1880年代後半にはこの認識はなくなる。C・H・ムーア『ゴシック建築の発展と性質』やスタージスの『欧州建築史研究』といった史論はこのゴシック観が歴史記述に応用されたものとして、ラスキンの建築論に対する言及が皆無のものとなった。

1893年のシカゴ万国博覧会は古典主義建築盛隆の画期だったが、それ以後にもアメリカ建築の現代性を巡る議論は、クラシシストたちによってさえゴシック建築に託されて語られた。この倒錯は、アメリカの建築論壇でゴシックの構造原理とクラシックの意匠原理の融和が模索されており、批評のなかでも建築表現のなかでもすでにそれが可能となっていたことから理解される。しかし当時の建築家・建築批評家たちのこの認識は、19世紀末以降にアーツアンドクラフツ運動を通じてゴシック・リバイバルを受容した論客の認識との齟齬を起こした。

ただし、建築論壇においてこのような両立が語られえたのは、1850年代のラスキン受容を経験した論客たちが存命だった1900年代までのことである。アメリカの近代建築史が書かれはじめるのは1890年代からのことだが、その後第一次世界以降に流行する通史研究はクラシック陣営とゴシック陣営の二派の建築史家に分かれ、アメリカ建築史における各自の正統性を主張しあった。

しかしクラシック陣営に属した論客には、19世紀中葉以前のクラシシズムの実践は構造合理主義的なものであったと主張しながらも、30年代半ばまではそれを立証する証拠が欠けていた。他方アメリカの論客はおしなべて、ゴシック・リバイバルがラスキンおよびヴィオレ＝ル＝デュクという二人の理論家を有していたという意識を共有しており、それに影響された過去の国内動向が一面において合理的な建設を目指したものであったという認識を共有していた。そのため1910年代末から1920年代のクラシック派のアメリカ近代建築史は、さまざまな方策によって、ゴシック・リバイバルの理論と認めた近代建築の特質を自陣営の記述のために活用した。

1860年代半ば以降には顧みられなくなったH・グリーンウの建築理論は、アメリカ建築史の通史構想にまつわるこのような軋轢を背景に有しながら1930年代半ばに発見された。これはアメリカ文学史上の“黄金時代”について進んだ1910年代以降の研究動向の帰結だ

ったが、以降、グリーンウの機能主義建築理論の存在はその後漸進的に国内の建築史家にも伝わっていき、J・M・フィッチ『アメリカン・ビルディング』（1948）およびL・マンフォード『アメリカ現代建築の源流』（1952）という、第二次世界大戦後のアメリカ近代建築史通史に組み込まれる。

しかし、19世紀中葉当時にラスキンとグリーンウの建築理論が同一視されていたという事実は、20世紀にはもはや理解されえぬものとなっていた。グリーンウの理論の発見とはクラシック派の史家にとって、アメリカ建築歴史が古典主義的かつ合理主義的な展開を辿ったことの証左だった。フィッチおよびマンフォードによる両著作はともにラスキンとグリーンウの建築理論を比較検討したが、アメリカ近代建築史に対しクラシック史観をとるかゴシック史観をとるかによって、その考察内容は、特にラスキンの評価について愛憎を含む真逆のものとなった。